

龍源寺報

秋彼岸号

臨濟宗・妙心寺派
住職 松原信樹
佛母寺住職 松原覚樹
正福寺住職 松原行樹
TEL 3451-1853
FAX 3451-6094

振込 00160-0-104918

東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com

URL: http://www.ryugenji.com

年回法要とは？

龍源寺住職 松原信樹

仏教では、人の死の瞬間から次の生を受けるまでの期間を「中有^{ちゆうう}」と呼びます。この期間が四十九日であり、一般的には四十九日を「萬中陰^{まんちゆういん}」と呼び、一つの区切りになっています。法要では本来、人の死後、七日ごと（初七日、二七日、三七日…）にお経をよみ、七回目の四十九日で一旦法要を打ち切ります。四十九日忌、百ヶ日忌を過ぎると、一周忌（小祥忌）、その一年後は、三回忌（大祥忌）となります。

『礼記』曲礼上第一に、「生には来日^{らいじつ}より与え^{かぞ}死には往日^{わうじつ}を与う」（生与来日、死与往日）とあり、生まれた子供の日数は、生まれた翌日から数え、亡くなった人の日数は、亡くなる前の日から数えるとあります。それは、死者に対して生前を追想する立場に立つからであるといわれ、例えば、平成二十九年七月二日に亡くなったなら、前日の七月一日が命日となり、二年後の七月一日が丸二年、つまり二十四ヶ月となるけれども、その翌日の本当の命日である七月二日は、二十五ヶ月目にあたり、三年目となります。数え年で三年、実質二年の法要を非常にめ

いという意味の「大祥」とよび、そのことが仏教側に取り入れられ、三回忌と呼ばれるようになります。以後、年回法要は、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌の法要となります。

年回法要はたくさんあり、何年も法要をしなければならず、大変に思えるかもしれません。しかし、年回法要に自分自身の身を委ねることで、最愛の人との死別という悲しみを少しずつですが、癒やすことができるのです。これは、今まで筆舌に尽くしがたいほどの悲しみを乗り越えて生きてきた仏教徒の知恵でもあるのです。亡き人と響き合うようなお参りをしたいものです。合理主義が叫ばれる中、せめて法事の時ぐらい、そのような気持ちから離れて、ご先祖さまと向き合ってお参りをしてみたいかがでしよう。法事は、「〇〇家法要」といったように、「家」の行事でもあります。それは結婚式でも同様です。亡くなった最愛の方は、目で見ることができないし、話してもできないけれども、いつでも、どこでも、あなたのことを見守っているのではないのでしょうか。あなたは一人ではありません。

寄付

金百万円也

折田久子殿

金三万円也

斎藤健殿

庭石多数

芝家殿

観音さまに

金百万円也

匿名殿

金五千円也

天野富美子殿

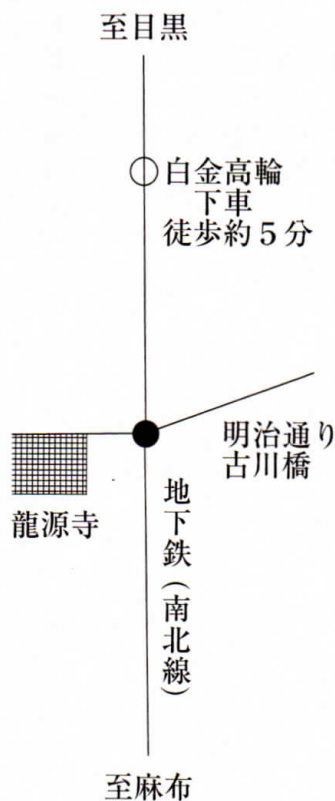
日月庵坐禅堂寄付

金五万円也

池田敏子殿

ありがとうございました

*将来は、本堂の裏地を整理して、大般若経を納める経蔵を建立する計画をしております。



秋ひがん法要

左の通り行ないます。ご家族そろってお参りください。

一、九月二十三日・秋分の日(午前十一時より)

一、法話

一、齋座(おとき)

※駐車場はありません。南北線をご利用ください。

龍源寺への交通の便(地下鉄)

●都営三田線

(目黒または三田、南北線は白金高輪駅下車。徒歩五分)

●2番出口から地上に出ると案内看板に「龍源寺」名あり

龍源寺への交通の便(都バス)

●田 87 渋谷駅—田町駅 魚ラン坂下下車

●都 06 渋谷駅—新橋駅 古川橋下車

●品 97 品川駅—新宿駅西口 魚ラン坂下・古川橋下車

●反 96 五反田駅—品川駅—六本木ヒルズ(循環)

魚ラン坂下・古川橋下車

●東 98 東京駅丸の内南口—目黒駅 魚ラン坂下下車

龍源寺の歴史について(九)

松原 泰道

先住祖来和尚が住職する前から、当寺には多大の借財がありました。和尚には、まづその返還が何よりの急務であつたので、忠実にその事にあたりました。その傍ら寺の修復をしなければ成りません。随分と苦勞をしたことでありましよう。

寺院としての面目をとりもどすのには十年を必要としたといわれます。それは現存の文書でもはつきりとわかることであります。

大正四年——大正天皇のご即位式を記念して、寺の表門が石門に改められました。それ迄の木造瓦ぶきの門は建立年代も不明で、大破していました。寺の修復に特に力を注がれた総代・中沢六之助氏の犠牲的努力の結晶として現在門が建立されました。

従来門は高さ七尺、間口十尺でありましたが、新門は高さ九尺、間口十二尺、一尺一寸角の石柱二本、九寸角の石柱一本、大土台と共に御影材が用いられました。その工事が堅牢であつたことは八年後の関東大震災にも、いささかの狂いもなく今日まで及んでいることでもわかります。

この工事に中沢氏は石材と石工手間の一切を寄附されました。鉄扉は、檀信徒中から和田、河野、坂谷、小岸の諸氏と寺の附近に家屋を所有したり住居中の吉田、伊藤、松下、永田、田中、大塚、松本の諸氏から寄進されました。(門扉は太平洋戦争が始まると供出を命じられたので、前記寄進者の同意を得て供出しました。現在の門扉は、戦後、隣接の大塚鉄工所の一寄進です。)

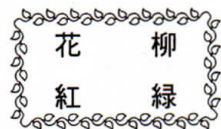
表門は、こうして面目を改めましたが、本堂そのものも建立期がわからない程古いので修繕が加え

られれば加えられる程、損傷個所もふえてゆく始末に、ついに改築の議が持ち上りました。

大正八年の中頃から、総代会議が頻繁に開催され、頭梁の坂谷松次郎氏によつて設計図が完成したので、その年の八月に勸募帳が作られました。募縁の趣旨は(原文漢文)

私(祖来和尚)が明治四十年に当寺住職の任命を受けてから苦心して寺塔を維持經營して来ましたが、推定百余年の小建造物であるので、修繕を幾度しても維持はなかなか困難です。近頃は雨漏りもしくぐ柱もくさつて手の施しようもありません。一時しのぎでは却つていけないので、ここに改築を決意しました(意訳)

と、あります。かくて本堂改築の実動にあつたのであります。



秋彼岸会を迎えます。今号は、年回法要について、仏教雑誌『大法輪』で執筆したものに加筆したものを掲載させていただきます。▼

執筆させていただいて気づいた事は、法事を執り行うことは、日本仏教の儒教的側面だということです。▼お寺の門柱に「大正四年建之」と書かれております。今号の「龍源寺の歴史について(九)」に「大正天皇のご即位式を記念して、寺の表門が石門に改められました」とあります。総代である先々代の豊前屋さんの寄進によるもので、現在でも皆さまを迎える門(入り口)として活躍しています。▼戦時中、防空壕に安置したのでしょうか。観音堂に安置してまず如意輪観音像の頭部の装飾に以前から修理しなければならぬ箇所があり、十一月に、職人さんに修理をしていただくことになりました。また、十月に寄進していただいた多数の庭石を置き境内を整えていきたいと思えます。▼できるかぎりを知り理解した上で

正しい判断をし、行動したいと考える私に、母はよく「解らないじゃない」、「仕方ないじゃない」と口癖のようにいいます。そう言われてみると、実は解らないことの方が世の中多くて、何でも知る必要など本当はないのではないかと思うことがあります。大いなるものに抱かれお任せするしかないと考える母の言葉には、きっと、寺で生まれ育ち人の寂しさ悲しさを見つめてきたものが根底にあるのかもしれませんが。妻の亜矢は、虫が苦手なようで、小さな虫でも見つけると逃げ回っていました。が、娘の瑞樹が生まれて少しずつ克服してきたようです。小林一茶の「やれうつな 蠅が手をする 足をする」という句があります。私がこの句を解釈すると蠅は自分自身の姿なんだけども、突然解るケースもあるので、彼女にその境地が開けるのを気長に待ちたいと思います。弟二人も元気に寺院の住職として仕事をしています。甥や姪も大きくなり、賑やかになりました。たまに龍源寺に来て、何泊かし彼らが

帰るとホッとするのは私だけの感情でしようか。▼お檀家さままでお葬式をだされる場合、信頼のある葬儀社を紹介させていただきます。病院からの流れの中で全てが決まってしまうケースが非常に多いようです。病院で臨終の際、まず一番はじめに龍源寺か、深夜でしたら、「あおば葬祭」〇三・五七二・七六五一(東京都目黒区下目黒五・七・二) [\[http://www.aoba-sousai.co.jp/\]](http://www.aoba-sousai.co.jp/) に、お電話を入れていただきたいと思えます。「あおば葬祭」は、丁寧なお仕事で皆さまに大変喜ばれています。葬儀、家族葬、密葬など気軽にご相談下さい。生前のご相談も受け付けています。渋谷区広尾にある合同船は、龍源寺の規則を守っていただければ、どなたでも利用ができます。▼九月二十二日、十三時より、ちらし寿司のお野菜の刻みを致します。お手伝いいただける方、宜しくお願い申し上げます。九月二十三日、秋彼岸会でお会いできることを楽しみにしております。ご家族でお参りください。